ニッポン臨終図巻

ドクター和の

㉘③ 俳優　白木みのる

ひそやかで幸福な旅立ちか

60歳以上の人ならば、1960年代を代表する時代劇コメディ『てなもんや三度笠』を覚えていることでしょう。「あたり前田のクラッカー」「非ッ常にキビシー！」などのギャグも、この番組から生まれました。そして、主演の藤田まことさんと名コンビを組み、珍念役で一世を風靡（ふうび）したのがこの人でした。

俳優で実業家の白木みのるさんが約2年前に亡くなられていました。SNSで芸能関係者が呟いたことから、スポーツ新聞が記事にし今月訃報が流れたということです。死因は明らかになっていません。

まれに、「○○さんが実は▲年前に亡くなっていた」という報道が出ます。そのたびに、僕はちょっぴり、うらやましい気分になります。何千人もの死を見てきた医者だからこそ「死とは一体、誰のものだろう？」というシンプルかつ、深淵（しんえん）な疑問が浮かんでくるからです。

がんなどの長い経過をたどる場合、自分の死期はある程度予期できます。しかし、「今、私はまさに死んだ」ということは、どんな人にもわかりません。そう考えると「死」とはどこまでも他者（家族を含む）のものであり、社会的なもの。つまり「死」を他者に知らせなければ、たとえ肉体は存在しなくても社会的にはずっと生きていることになるのでは？　と思うのです。もちろん年金目当てに家族の死をずっと隠していたなどの昨今の犯罪は、別問題ですが。

人間は、死んでいるか生きているかわからない者に、ロマンを感じます。「千利休は実は切腹していない」とか、「源義経が生き延びてチンギス＝ハンになった」とか、偉人の生存伝説は各地に数多く残っています。

白木みのるさんは、この生存伝説にふさわしい、不思議な魅力を持った人でした。地元芦屋では、実業家として有名だったので、芸能界を引退されてからは悠々自適にセカンドライフを楽しんでいたはずです。

しかし満州引き揚げ者であり、身長が小さかった彼は少年時代、数々の辛酸をなめたようです。身長の問題から、結婚も諦めたとインタビューで語っています（『週刊新潮』2007年）。

「僕は寸法が足りなくて、一人前の人間じゃないからね、女性も困るだろうと思っていました。ずっと独りで暮らしたいな」

もしも晩年結婚していたら、相続問題などで最期にトラブルになっていたかも…誰にも知らせない死は、決して孤独な死ではない。余生を過ごしていた老人ホームで多くの人に看取られての、ひそやかで幸福な旅立ちだったと想像します。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。この連載が『平成臨終図巻』として単行本化され、好評発売中。関西国際大学客員教授。